

## 教育研究所購入図書一覧（2006年度以降）

教育研究所の所蔵図書の閲覧を希望される教職員の皆様は、当研究所までお申し出ください。所定の手続きを踏まえて貸出をしております。

### 2012年度購入図書一覧（和書・順不同）

- ・比較教育学事典、日本比較教育学会編、東信堂、2012年
- ・大学のカリキュラムマネジメント―理論と実際―、中留武昭著、東信堂、2012年
- ・学生の学力と高等教育の質保証〈1〉、山内乾史緒、学文社、2012年
- ・教育学年報〈9〉大学改革（教育学年報9）、藤田 英典（編集）、片桐 芳雄（編集）、黒崎 勲（編集）、佐藤 学（編集）、世織書房 2012年
- ・高等教育論入門、早田 幸政（編集）、青野 透（編集）、諸星 裕（編集）、ミネルヴァ書房、2010年
- ・ボランティア教育の新地平、桜井 政成（編さん）、津止 正敏（編さん）著、ミネルヴァ書房 2009年
- ・大学生のためのリサーチリテラシー入門、山田剛史、林創著、ミネルヴァ書房、2011年
- ・大学における学習支援への挑戦、日本リメディアル教育学会監修、ナカニシヤ出版、2012年
- ・大学と変える大学教育、清水亮、橋本勝、松本美奈編、ナカニシヤ出版、2009年
- ・学生主体型授業の冒険、小田隆治、杉原真晃編著、ナカニシヤ出版、2010年
- ・大学におけるキャリア教育の実践、小樽商科大学地域研究会編 ナカニシヤ出版、2010年
- ・大学生のためのデザインングキャリア、渡辺三枝子、五十嵐浩也、田中勝男、高野澤勝美著、ナカニシヤ出版、2011年
- ・大学生のキャリア発達、宮下一博著、ナカニシヤ出版、2010年
- ・協同学習の技法、E.F.Barkley/K.P.Cross/C.H.Major著、ナカニシヤ出版、2009年
- ・実践！アカデミックディベート、安藤香織、田所真生子編、ナカニシヤ出版、2002年
- ・生成する大学教育学、高等教育研究開発推進センター編、ナカニシヤ出版、2012年
- ・学生・職員と創る大学教育、清水亮、橋本勝編、ナカニシヤ出版、2012年
- ・学生の納得感を高める大学授業、山地弘起、橋本健夫編著、ナカニシヤ出版、2012年
- ・グローバルキャリア教育、友松篤信編、ナカニシヤ出版、2012年
- ・大学教育の臨床的研究 田中每実著、東信堂、2011年
- ・スタンフォード21世紀を創る大学、ホーン川嶋瑤子著、東信堂、2012年

- ・ 学士課程教育の質保証へむけて、山田礼子著、東信堂、2012年
- ・ 大学自らの総合力、寺崎昌男著、東信堂、2010年

#### 2011年度購入図書一覧（和書・順不同）

- ・ 批判的思考力を育む、楠見 孝, 子安 増生, 道田 泰司、有斐閣、2011年
- ・ 高等教育室保証の国際比較、羽田 貴史, 杉本 和弘, 米澤 彰純、東信堂、2009年
- ・ 私立大学の経営と拡大・再編、両角亜希子、東信堂 2010年
- ・ 学習経験をつくる大学授業法、L. デイー・フィンク 、玉川大学出版部、2011年
- ・ 変貌する世界の大学教授職、有本 章、玉川大学出版部、2011年
- ・ 学級経営読本、小島 宏、玉川大学出版部、2012年
- ・ 転換期日本の大学改革、江原 武一、東信堂、2010年
- ・ 成績評価の厳格化と学習支援システム 半田 智久、地域科学研究会 2011年
- ・ リーディングス 日本の教育と社会―⑫高等教育 塚原 修一, 広田 照幸、日本図書センター、2009年

#### 2010年度購入図書一覧（和書・順不同）

- ・ 大学の反省、猪木武徳、NTT出版、2009年
- ・ 2011年版大学ランキング、週刊朝日進学MOOK、2010年
- ・ 初年次教育でなぜ学生が成長するのか 、河合塾、東信堂、2010年
- ・ 学力問題のウソ、小笠原喜康、PHP研究所、2008年
- ・ 大学とキャンパスライフ、武内清、上智大学出版、2005年
- ・ リーディングス日本の教育と社会―第1巻学力問題・ゆとり教育、中村高康編、玉川大学出版部、2010年
- ・ リーディングス日本の教育と社会―第3卷子育て・しつけ、橋本鉦市編、玉川大学出版部、2010年
- ・ リーディングス日本の教育と社会―第5巻大学と学問、阿曾沼明裕、玉川大学出版部、2010年
- ・ リーディングス日本の教育と社会―第6巻歴史教科書問題、村澤昌崇編、玉川大学出版部、2010年
- ・ 大学と社会、安原義仁、放送大学教育振興会、2008年
- ・ 高等教育質保証の国際比較、羽田貴史、東信堂、2009年
- ・ 私立大学の経営と拡大・再編、両角亜希子、東信堂、2010年

- ・戦後日本産業の大学教育要求、飯吉弘子、東信堂、2008年
- ・大学教育を科学する、山田礼子、東信堂、2009年
- ・大学における書く力考える力、井下千以子、東信堂、2008年
- ・2010年版大学ランキング、朝日新聞出版、2009年
- ・「教育改革」と労働のいま、日本社会臨床学会、現代書館、2008年
- ・国際移動と教育、江原裕美、明石書店、2011年
- ・グローバル化時代の教育の選択、増淵幸男、上智大学出版、2010年
- ・大学の危機、草原克豪、弘文堂、2010年
- ・教育用語辞典、山崎英則編、ミネルヴァ書店、2003年
- ・教育学をひらく、鈴木敏正、青木書店、2009年
- ・「教育」としての職業指導の成立、石岡学、勁草書房、2011年
- ・大学を変える、東海高等教育研究所、大学教育出版、2010年
- ・シティズンシップへの教育、中山あおい、新曜社 2010年
- ・学校の挑戦、佐藤学、小学館、2006年
- ・教師花伝書、佐藤学、小学館、2009年
- ・リーディングス日本の教育と社会―③子育て・しつけ、広田照幸日本図書センター、2007年
- ・リーディングス日本の教育と社会―⑤愛国心と教育、大内裕和、日本図書センター、2007年
- ・リーディングス日本の教育と社会―⑥歴史教科書問題、三谷博、日本図書センター、2007年
- ・リーディングス日本の教育と社会―⑦子どもと性、浅井春夫、日本図書センター、2007年
- ・リーディングス日本の教育と社会―⑧いじめ・不登校、伊藤茂樹、日本図書センター、2007年
- ・リーディングス日本の教育と社会―⑨非行・少年犯罪、伊藤茂樹、日本図書センター、2007年
- ・リーディングス日本の教育と社会―⑩子どもとニューメディア、北田暁大・大多和直樹、日本図書センター、2007年

## 2009年度購入図書一覧（和書・順不同）

- ・資料で読む戦後・日本と愛国心 第一巻、市川昭午、日本図書センター、2008年
- ・資料で読む戦後・日本と愛国心 第二巻、市川昭午、日本図書センター、2009年
- ・資料で読む戦後・日本と愛国心 第三巻、市川昭午、日本図書センター、2009年
- ・論文を書くためのWord利用法、くろしお出版、2009年
- ・知のナビゲーター、くろしお出版、2007年
- ・知へのステップ 改訂版、くろしお出版、2006年

- ・ 知のワークブック、くろしお出版、2006年
- ・ 落下傘学長奮闘記、黒木登志夫、中央公論新社、2009年
- ・ 最新教育データブック 第12版、清水一彦、時事通信出版局、2008年
- ・ アカデミック・ポートフォリオ、ピーター・セルディン、玉川大学出版部、2009年
- ・ 基礎からわかるポートフォリオのつくり方・すすめ方、佐藤真、東洋館出版社、2002年
- ・ 国民国家システムの変容、吉川宏、学術出版会、2008年
- ・ アメリカの大学開放、五島敦子、学術出版会、2008年
- ・ 近代日本教育会史研究、梶山雅史、学術出版会、2007年
- ・ 臨時教育審議会、渡部蕪、学術出版会、2006年
- ・ 大学英語教育における教授手段としてのポートフォリオに関する研究、峯石緑、溪水社、2002年
- ・ 大学の實力、読売新聞社、中央公論新社、2009年
- ・ 大学を語る 22人の学長、玉川大学出版部、1997年
- ・ 大学個性化の戦略、玉川大学出版部、2000年
- ・ 大学教師の自己改善、玉川大学出版部、2000年
- ・ 大学進学の世界、小林雅之、東京大学出版会、2009年
- ・ 21世紀の教育を拓く、山田耕路、西日本新聞社、2009年
- ・ 高等教育質保証の国際比較、羽田貴史、東信堂、2009年
- ・ 教育とエビデンス、経済協力開発機構、明石書店、2009年
- ・ 教育研究ハンドブック、立田慶裕、世界思想社、2008年
- ・ キャリア教育概説、日本キャリア教育学会、東洋館出版社、2008年
- ・ 変貌する日本の大学教授職、有本章、玉川大学出版部、2008年
- ・ 統計学からの計量経済学入門、藤山英樹、昭和堂、2007年
- ・ 批判的リテラシーの教育、竹川慎哉、明石書店、2010年
- ・ 転換期を読み解く、潮木守一、東信堂、2009年
- ・ リーディングス日本の教育と社会第1巻、学力問題・ゆとり教育、広田照幸、日本図書センター、2009年
- ・ リーディングス日本の教育と社会第2巻、学歴社会・受験戦争、広田照幸、日本図書センター、2007年
- ・ リーディングス日本の教育と社会第4巻、教育基本法、広田照幸、日本図書センター、2006年
- ・ リーディングス日本の教育と社会第12巻、高等教育、広田照幸、日本図書センター、2009年

## 2008年度購入図書一覧（和書・順不同）

- ・学力低下は錯覚である、神永正博、森北出版、2008年（第9集に書評掲載）
- ・国立大学・法人化の行方、天野郁夫、東信堂、2008年
- ・フンボルト理念の終焉？—現代大学の新理念、潮木守一、東信堂、2008年
- ・教育人間論のルーマン、田中智志・山名淳、勁草書房、2004年
- ・他者の喪失から感受へ、田中智志、勁草書房、2002年
- ・大学生のための日本語表現トレーニングスキルアップ編、橋本修、三省堂、2008年
- ・自分 私を拓く、水原克敏、東北大出版、2003年
- ・三高の見果てぬ夢—中等・高等教育成立過程と折田彦市、巖平、思文閣出版、2008年
- ・札幌農学校と英語教育、外山敏雄、思文閣出版、1992年
- ・高等教育の経済分析と政策、矢野眞和、玉川大学出版部、1996年
- ・大学改革の海図、矢野眞和、玉川大学出版部、2005年
- ・教育社会の設計（UP選書）、矢野眞和、東京大学出版会、2001年
- ・入試改革の社会学、中澤渉、東洋館出版社、2007年
- ・大学とキャンパスライフ、武内清、上智大学出版、2008年
- ・学校システム論、竹内洋、放送大学教育振興会、2007年
- ・これからの教養教育—「カタ」の効用(未来を拓く人文・社会科学)、葛西康德、鈴木佳秀、東信堂、2008年
- ・団塊世代の同時代史(歴史文化ライブラリー)、天沼香、吉川弘文館、2007年
- ・戦後教育のなかの〈国民〉—乱反射するナショナリズム、小国喜弘、吉川弘文館、2007年
- ・知と学びのヨーロッパ史—人文学・人文主義の歴史的展開（MINERVA西洋史ライブラリー）、南川高志、吉川弘文館、2007年
- ・改めて「大学制度とは何か」を問う、館昭、東信堂、2007年
- ・原点に立ち返っての大学改革、館昭、東信堂、2006年
- ・30年後を展望する中規模大学マネジメント・学習支援・連携、市川太一、東信堂、2006年
- ・ティーチング・ポートフォリオ—授業改善の秘訣、土持ゲーリー法一、東信堂、2007年
- ・世界標準の読解力—OECD・PISAメソッドに学べ、岡部憲治、白日社、2007年
- ・心理統計学の基礎—統合的理解のために、南風原朝和、有斐閣アルマ、2002年
- ・実践的研究のすすめ—人間科学のリアリティ、小泉潤二・志水宏吉、有斐閣、2007年
- ・大学の学び・入門—大学での勉強は役に立つ！、溝上慎一、有斐閣アルマINTEREST、2006年
- ・大学生の就職とキャリア—「普通」の就活・個別の支援、小杉礼子、勁草書房、2007年

- ・大学生の職業意識とキャリア教育、谷内篤博、勁草書房、2005年
- ・働く意味とキャリア形成、谷内篤博、勁草書房、2007年
- ・キャリア教育と就業支援、小杉礼子・堀有喜衣、勁草書房、2006年
- ・教育史研究の最前線、教育学史会編、日本図書センター、2007年
- ・資料で読む前後日本と愛国心〈第1巻〉復興と模索の時代一九四五～一九六〇、市川昭午、日本図書センター、2008年
- ・大学ランキング、「週刊朝日」進学MOOK、2008年
- ・日本の大学教授市場（高等教育シリーズ142）、山野井敦徳、玉川大学出版部、2007年
- ・ベストプロフェッサー（高等教育シリーズ）、ケン・ベイン、玉川大学出版部、2008年
- ・大学の英語教育を変えるーコミュニケーション力向上への実践指針、山地弘起、玉川大学出版部、2008年
- ・アメリカの学生獲得戦略（高等教育シリーズ）、山田礼子、玉川大学出版部、2008年
- ・大学教育を変える教育業績記録、ピーター・セルディン、玉川大学出版部、2007年

#### 2007年度購入図書一覧（和書・順不同）

- ・大学を解体せよ、中野憲志、現代書館、2007年
- ・大学図鑑！2008、オバタカズユキ、ダイヤモンド社、2007年
- ・学生諸君！ 夏目漱石他、光文社、2006年
- ・大学教育のエクセレンスとガバナンス、地域科学研究会、地域科学研究会、2006年
- ・教育学事始め、氏家重信、北大路書房、2007年
- ・学生による教育再生会議、東京学生教育フォーラム、平凡社新書、2007年
- ・大学改革の社会学、天野郁夫、玉川大学出版部、2007年
- ・大学のイノベーション、坂本和一、東信堂、2007年
- ・あたらしい教養教育をめざして、大学教育学会、東信堂、2004年
- ・学力を育てる、志水宏吉、岩波書店、2006年
- ・大学ランキング、2008年版、週刊朝日進学MOOK、朝日新聞社、2007年
- ・大学の教育力、金子元久、筑摩書房、2007年
- ・教育デザイン入門、実践的ソフトウェア教育コンソーシアム、オーム社、2007年
- ・大学改革その先を読む、寺崎昌男、東信堂、2007年
- ・大学卒業制度の崩壊、藤田整、文芸社、2007年
- ・大学教育の思想、絹川正吉、東信堂、2006年

- ・大学における初年次少人数教育と「学びの転換」、東北大学高等教育開発推進センター、東北大学出版会、2007年
- ・A O型入学選抜の多様な進化(上)、地域科学研究会、地域科学研究会、2000年
- ・A O型入学選抜の多様な進化(下)、地域科学研究会、地域科学研究会、2001年

## 2006年度購入図書一覧（和書・順不同）

- ・恐るべきお子さま大学生たち、ピーター・サックス、草思社、2000年（第6集に内容紹介掲載）
- ・息子・娘を成長させる大学、読売新聞社、読売新聞社、2006年
- ・潰れる大学・伸びる大学辛口採点2007年版、梅津和郎、エール出版社、2005年
- ・大学ランキング 2007年版、朝日新聞社、朝日新聞社、2006年
- ・危ない大学・消える大学 2007年版、島野清志、エール出版社、2006年
- ・大学改革の社会学、天野郁夫、玉川大学出版部、2006年
- ・大学生活ナビ、玉川大学コア・F Y E教育センター編、玉川大学出版部、2006年
- ・大学論、エイブラハム・フレックスナー、玉川大学出版部、2005年
- ・プロフェッショナル化と大学、日本高等教育学会編、玉川大学出版部、2004年
- ・ヨーロッパの高等教育改革、ウーリッヒ・タイヒラー、玉川大学出版部、2006年
- ・アジアの高等教育改革、フィリップ・G・アルトバック&馬越徹編、玉川大学出版部、2006年
- ・戦後日本の高等教育改革政策、土持ゲーリー法一、玉川大学出版部、2006年
- ・私学高等教育の潮流、P h. G・アルトバック編、玉川大学出版部、2004年
- ・高等教育 改革の10年、日本高等教育学会編、玉川大学出版部、2003年
- ・大学教育「教育評価ハンドブック」、ラリー・キーン&マイケル・D・ワガナー、玉川大学出版部、2003年
- ・知識基盤社会と大学の挑戦、佐々木毅、東京大学出版会、2006年
- ・オランダの個別教育はなぜ成功したのか、リヒテル直子、平凡社、2006年
- ・じょうずな勉強法、麻柄啓一、北大路書房、2005年
- ・大学講義の改革、宇田光、北大路書房、2005年
- ・大学基礎講座 改増版、藤田哲也、北大路書房、2006年
- ・“学生”になる！、浦上昌則、北大路書房、2006年
- ・S D（スタッフ・ディベロップメント）が育てる大学経営人材、山本眞一、文葉社、2004年
- ・21世紀の大学職員像、立命館大学、かもがわ出版、2005年
- ・人が学ぶということ、今井むつみ、野島久雄、北樹出版、2003年

- ・研究計画書デザイン、細川英雄、東京図書、2006年
- ・これで書ける！大学院研究計画書攻略法、進研アカデミーグラデュエート大学部編、オクムラ書店、2002年
- ・大学力、有本章、北垣郁雄、ミネルヴァ書房、2006年
- ・大学激動、朝日新聞社、朝日新聞社、2003年
- ・大学事務職員のための高等教育システム論、山本眞一、文葉社、2006年
- ・認知心理学者新しい学びを語る、森敏昭、北大路書房、2002年
- ・授業を変える、米国学術研究推進会議、北大路書房、2002年
- ・学力低下論争、市川伸一、ちくま新書、2002年
- ・学ぶ意欲の心理学、市川伸一、P H P 研究所、2001年
- ・学ぶこと・教えること、鹿毛雅治、金子書房、1997年
- ・授業デザインの最前線、高垣マユミ、北大路書房、2005年
- ・教材設計マニュアル、鈴木克明、北大路書房、2002年
- ・大学講義の改革、宇田光、北大路書房、2005年
- ・教育力、斎藤孝、岩波新書、2007年

## 所収和雑誌

- |                 |             |                 |
|-----------------|-------------|-----------------|
| ・大学教育学会誌        | 1980年～      | No.1～ (旧一般教育会誌) |
| ・大学資料           | 1989年～      | No.139～         |
| ・大学と学生          | 1989年～2011年 | No.397～565      |
| ・内外教育           | 1989年～      | No.4023～        |
| ・文部科学時報         | 1989年～2012年 | No.1344～1635    |
| ・教育委員会月報        | 1989年～      | No.465～         |
| ・教育情報パック        | 1990年～2007  | No.401～806      |
| ・I D E ー現代の高等教育 | 1991年～      | No.276～         |

## 継続購入資料

- |                     |                      |
|---------------------|----------------------|
| ・発達障害白書             | 1996年～               |
| ・文部科学白書 (旧我が国の文教政策) | 1996年～               |
| ・学校基本調査報告書          | 1992年～ (初等中等教育、高等教育) |

## 教育研究所参加の2012年度学会・研究会

以下、教育研究所が機関会員になっているFD関係の学会ならびに所員が継続的に参加している研究フォーラム等の2012年度の活動を報告します。この種の学会やフォーラムに参加を希望される教職員は、本学の「FD推進委員会」管轄の旅費をご活用して下さい。詳しくは、各学部のFD推進委員会委員にお問い合わせ下さい。

### 1. 大学教育学会第34回（2012年）大会

会場校：北海道大学高等教育推進機構

日時：2012年5月26日（土）～27日（日）

出席者：1名 水谷 修

#### 総合テーマ：「転換期の大学教育」

テーマ解題：日本の大学はこの10数年、18歳人口の減少や経済の停滞で、財源や入学志願者の確保など大きな経営課題に直面してきた。拡大した高等教育は、産業構造の変化に対応して職業への移行をどう果たすかという大きな課題も抱えている。加えて2011年3月の東日本大震災と、それによって誘発された福島第一原子力発電所の事故は、エネルギーの需給関係のみならず、日本社会の仕組みを変えてしまう可能性さえ感じさせる。日本の高等教育が抱えている矛盾は、このことによって加速されることはあっても緩和されることはない。転換期の大学にいま厳しく求められているものは、教育の達成目標と成果の可視化である。

本大会では、それを推し進めるための教育情報の在り方、および時代の変化に適応するための市民の科学的素養を高める方策を明らかにすることを主要な目標とする。

#### 5月26日（土）

##### ・ラウンドテーブル（テーマ一覧）

「学生と楽しむ大学教育－橋本メソッド疑似体験」「学生の理解を深める教授学習（deep approach）その2」「学生の目を輝かせる大学教育の可能性Ⅳ－『大学学生教員職員三輪車論』の可能性の検証」「キャリア教育の質保証に向けたライティングスキルズ育成を考える(1)－学士課程教育における問題点」「大学教育におけるピア・サポートの位置づけ－正課と正課外の狭間で」「学生アスリートのライフスキルと学業・学習支援」「体系的なカリキュラム構築と学習成果の可視化のためのルーブリックの構築・活用」「学習成果の直接評価に向けて－パフォーマンス評価の可能性」「共通教育全国調査をめぐ

って」「一般教育の知的遺産を活かす（その4）」「保健医療福祉系大学における教養教育の問題（3）—コア・カリキュラムにおける人文社会系教養の意義を考える」「大学IRコンソーシアムの可能性—取組の事例報告と今後への期待」「ポストGP時代の大学間連携事業のマネジメント」「学生とともに進めるFD」「教育改善における大学執行部の役割とリーダーシップ」「カリキュラム・マネジメントにおける教職協働」

#### ・基調講演

「ノーベル化学賞への道」 講師：鈴木 章（北海道大学名誉教授・ノーベル賞受賞者）

概要：2010年にノーベル化学賞を受賞した鈴木章氏は、生活に身近な素材や薬品を生み出す有機合成化学の革新をなすとげた。大学では数学を専攻するつもりだったが、教養時代にフィーザーの教科書“Organic Chemistry”に出会い、人間が必要とするものを人為的に作り出す有機化学を究めてみたいと、有機化学教室に入った。講演では、化学を志すに至った経緯、1960年代の米国での生活の様子や日米の研究室の比較、ノーベル賞受賞にいたる経緯やクロス・カップリング反応について説明する。

#### ・自由研究発表 I

5月27日（日）

#### ・自由研究発表 II

#### ・シンポジウム I

テーマ：「学士課程教育の質の改善と教育情報」

シンポジスト：山田 礼子（同志社大学）

半田 智久（お茶の水女子大学）

高橋 哲也（大阪府立大学）

工藤 潤（大学基準協会）

趣旨：学校教育法施行規則の改正で、2011年4月から、すべての大学に教育情報の公開が義務づけられ、ウェブサイトなどを通じて大量の教育情報が発信されるようになった。このこと自体画期的といえるが、それにより、わが国の学士課程教育に固有の問題が浮き彫りになり、教育情報の作成・公開を学士課程教育の質の改善にどのように結びつけるかという新たな課題も生じている。

シンポジウムでは、学士課程教育のアウトカムに力点を置きながら、教育の質の改善を目指して、学士課程を横断する基礎的分野のプログラムをどのように構築するか、直接評価（GPA）あるいは間接評価（学生調査）を通して見た学生の学び、認証評価からみた学士力の実質化などについて、具体的な議論を行う。

具体的な検討課題（パネリストのテーマ）は、以下の4点である。

- ・ 学士課程教育のプロセス評価から学生の学びをみる
- ・ 学士課程教育の質改善に寄与する高機能GPAのエビデンス
- ・ 学士課程教育における数学力育成の取組について
- ・ 学士課程教育と学士力の実質化 ― 認証評価からみた現状と課題

・ シンポジウムⅡ 「転換期における科学リテラシー教育の課題」

・ 緊急シンポジウム

テーマ：「大学への秋期入学をめぐる」

話題提供：鈴木 敏之（東京大学 副理事）

コメント：山口 佳三（北海道大学 副学長）

趣旨：最近にわかに注目され、多くの大学で真剣な議論が交わされている「大学への秋入学」導入について、東京大学副理事鈴木敏之氏に話していただく特別企画である。諸外国に合わせた入学時期とギャップタームの導入は、日本の大学教育の大きな転換点になるかもしれない。この企画が各大学における議論の展開に役立つことを期待している。

## 2. 第62回東北・北海道地区大学等高等・共通教育研究会 (旧：東北・北海道地区大学一般教育学研究会)

会場校：酪農学園大学

日 時：2012年8月31日(金)、9月1日(土)

出席者：1名 小原 将照

全体テーマ：「誰のための学士課程教育か？―学生・教職員・大学それぞれの自己実現の観点から―」

趣旨：学士課程答申の中では「学士課程教育の構築が、我が国の将来にとって喫緊の課題」「経済社会から、職業人としての基礎能力の育成、さらには創造的な人材の育成が強く要請されている」など、学士課程教育の整備を進める背景には国や経済社会の強い要請があるとする記述が繰り返されている。さらに、大学が学生に身に付けさせようとする能力と、企業が大学卒業生に期待する能力の間に、行き違いが散見されることも指摘されている。確かに、教育政策においては、教育の成果が国や経済社会の発展に資する側面も重要であるかもしれない。しかしながら、教育は第一に、各個人が持つ「天からの賜り物」を引き出す営為であるべきではなかろうか。その意味において、学士課程教育は、①「学生自身の自己実現」のためにあると言える。その一方、各大学（特に私学）には独自の建学理念に

基づいたミッション（使命）があり、そのミッションを遂行すべく学士課程教育は構想されている。学士課程答申においても、各大学の教育理念や建学の精神との関連に十分留意して、学習成果として目指す姿を明確に示すことが必要であると指摘している。この点において、学士課程教育はミッション遂行を目指す②「大学自身の自己実現」に向けた取り組みである、と見なすことができる。そして、教育現場で学生の学びと向き合い、大学のミッションを背景に持ちながら学生に働きかける教職員がその営みを継続するには、自身が“情熱”や“やりがい”や“希望”を持ち続けることが重要である。学士課程答申においても「教学運営に当たっては、学士課程教育の実践と管理運営を担う教職員の資質と能力に負うところが極めて大きい」と指摘している。この点において、学士課程教育は③「教職員の自己実現」への意欲があつてこそ成就すると言える。本研究会では、学士課程教育をこの三つの自己実現がクロスオーバーする場として捉え、そのダイナミズムを多元的に議論することを目指して、基調講演、分科会、事例報告を企画している。

## 8月31日（金）

### ・基調講演「高いキャリア意識が学習を促し、就業パフォーマンスを規定する」

講師：溝上 慎一（京都大学）

内容：今日の大学教育改革の特徴は、大学や教員が何を教えるかではなくて、学生が何を学びどのように成長するかを指標として、言い換えれば、「学生の学びと成長（student learning and development）」の観点から教育改善やFDをおこなおうとしている点にある。講演者はこのような学生の学びと成長の観点から、いったいどのような学生が主体的に学び自らの成長を実感しているのかという検討をこれまでおこなってきた。その中で大きく明らかになってきたことの一つは、成長につながる学びをおこなう学生はキャリア意識が高いということである。しかし、高いキャリア意識と言っても、それは単に「将来の見通し」を持っているくらいのことではない。成長につながるキャリア意識とは、「将来の見通し」という認知表象を持ちつつ、かつそれを日常の生活世界のなかで何かしら具現化していることを指す。調査ではそれを「理解実行」というかたちで、具体的には「将来の見通しを実現すべく、何をしたらいいか理解し、それを実行していますか」と重ねて問う。講演者は将来の見通し+理解実行を、Future lifeとDaily lifeの実現という意味で「2つのライフ」と呼んでいる。多くの調査結果から、2つのライフの高い者は成長につながる学習をおこなっていると言えるのである。加えて、パネル調査の結果からは、2年生時に“見通しあり+理解実行”群には4年生11月の時点で就職活動の“第一志望に内定”した者が60.9%もおり（統計的に有意差あり）、二つのライフが学習のみならず就職活動にも影響を及ぼすことを示唆している別のコホートのパネル調査でも同様の結果は得られている。

基調講演では最新のデータが紹介された。25-29歳・30-34歳・35-39歳の企業人（30-499人・500人以上の会社規模別）を対象にした社会人調査の結果である。学生時代を振り返る調査ということ

で結果の信頼性に限界があることは前提としなければならないが、そこでは、関係性や活動が豊かで与えられる勉強以上のものをしなかった者と、主体的に学習をおこなってきた者との就業パフォーマンス（能力・業績）に差が認められなかった、という結果が得られている。企業人から経験的に語られることの少ない学習の成果を示す結果の一つとなる。しかも、近年企業で必要と叫ばれている“就業キャリア”（自ら望む仕事や人生をデザインすること）については、主体的な学習をおこなってきた者の得点が高いという結果も得られている。そして、この主体的な学習を支えるのは、はやい時期（調査結果では高校1・2年生から）から形成してきた高いキャリア意識である。基調講演では、さまざまな角度・データから、高いキャリア意識が持つ学習、就業パフォーマンスへの影響についての考察結果が紹介された。

## ・分科会

### 第1分科会テーマ「学生の自己実現を支援する取組み」

この分科会では、学生の自己実現を支援する取組みについて焦点を当てて、経験と意見の交流を深めることを目的としている。能力の一側面において不足のある学生に対して、それを補う術をスキルとして提示することは、その学生の大学生活と将来への見通しに希望を与えることに寄与すると考えられる。他方で、能力不足を補うことばかりを強調すると、能力の多面性と多様な人間が協働する社会という視点を失いかねない。特に共通教育においては、このスキル獲得と多様性理解の均衡に配慮する必要があると考えられている。また、個別の授業科目でどちらの学びを主に提供するにせよ、学生が主体的に関わって行く工夫も重要です。この分科会では、スキル教育、キャリア教育、学習支援、アクティブラーニング、サービスマーケティング、ボランティア活動・課外活動への支援など、学生の自己実現を支援する取組みについての話題を中心に各種の報告が実施された。

### 第2分科会テーマ「大学の自己実現を目指す取組み」

この分科会では、大学の自己実現を目指す取組みについて焦点を当て、大学全体の組織的取組みについて考えることを目的とする。全体テーマの趣旨にもあるように、学士課程教育の目指すところを学生の自己実現と規定するならば、学生の進学先選択の重要な情報源として、各大学はディプロマ・ポリシー（DP）、カリキュラム・ポリシー（CP）、アドミッション・ポリシー（AP）を公開しなければならない。これら三つのポリシーを策定する営みは、同時に各大学のミッションを現代社会の中であってどのように位置付け、それを具体的な教育運営にどのように結び付けて行くかを、教職員全員で共有する過程でなければならない。したがって、この過程そのものが、各大学のミッション遂行の一部となる。また、大学が社会においてその役割を果たすには、他大学との連携、地域との連携、エクステンション活動も重要である。

この分科会では、学修評価の目標設定と測定、教育課程の体系化、共通教育の実施・責任体制、学

部・学科の在り方の見直し、大学間連携、地域との連携など、大学自身の自己実現を目指した組織的な取組みについての話題を中心に各種の報告がなされた。

### 第3分科会テーマ「教職員の自主的な取組みと、それを促す取組み」

この分科会では、教職員の自主的な取組み、及び、それを促す取組みについて焦点を当て、経験と意見の交流を深めることを目的とする。教育現場で学生の学びと向き合い、大学のミッションを背景に持ちながら学生に働きかける教職員がその営みを継続するには、教職員自身が“情熱”や“やりがい”や“希望”を持ち続けることが重要である。学士課程答申においても「教学運営に当たっては、学士課程教育の実践と管理運営を担う教職員の資質と能力に負うところが極めて大きい」と指摘している。学士課程教育は教職員の内発的な意欲によって支えられると言っても過言ではない。

この分科会では、新しい教授法の展開、授業評価アンケートの活用、ICTを活用した授業の実践、授業の相互参観、教育活動へのインセンティブ導入、FDセンターの設置と活動、ティーチング・ポートフォリオの導入と活用、専門性のある職員の活動、教職協働の実践例など、教職員の自主的な取組み並びにそれを促す取組みについての話題提供を中心に各種の報告がなされた。

## 9月1日（土）

### ・事例報告「初年次教育における教育目標をめぐる問題～法政大学『基礎ゼミ』の実践例を通して～」

報告者：藤田 哲也（法政大学）

内容：近年、多くの大学で新生を対象にした「初年次教育」に取り組むようになってきたが、その一方で「何をどう教えたらよいかわからない」という声も少なくないように思われる。そもそも「初年次教育」のあり方について、答えは一つではないし、各大学の事情に合わせて教育目標を構築していくべきだと考えるのが、講演者の基本的スタンスである。本講演では、そのような教育目標に関する議論をする上で有益だと思われる「枠組み」を提供することを目的としている。

具体的には、まず学士課程教育の中の初年次教育という観点から、社会人基礎力や学士力と、初年次教育のカリキュラム内容との関係について概説する。その上で、講演者が法政大学で行っている「基礎ゼミ」の実践例の紹介がなされた。そして、その実践例を参加者全員が体験することを目的として、ワークショップのスタイルでの報告がなされた。

### 3. 大学教育学会2012年度課題研究集会

会 場：くにびきメッセ（鳥根県立産業交流会館）

日 時：2012年11月23日（土）～24日（日）

出席者：1名 千葉 昭彦

#### 統一テーマ：「グローバル社会における大学教育の質保証」

本年8月28日に中央教育審議会が新たな答申『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～』を取りまとめたが、その内容は学士課程教育の質的転換のための方策を、各大学が大学支援組織や文部科学省、企業・地域社会等と連携しながら、実行し、大学教育の“質的転換”強く求める内容になっている。この答申が、これからの大学教育にどのような影響を与えていくのか、情報交換し、ともに考え、意見を交換する機会にしたい。

11月23日（金）

#### 基調講演「グローバル社会における大学教育の質保証」

講演講師 安西祐一郎

（日本学術振興会理事長・文部科学省中央教育審議会副会長・大学分科会会長）

概要：戦後日本の大学の課題を総括した上で、近年の大学に対する教育政策の現況を解説。とりわけ2008年『学士課程教育の構築に向けて』、2010年『グローバル社会の大学院教育』、2012年「社会の期待に応じる教育改革の推進」（文部科学大臣）、そして2012年8月28日の中央教育審議会の答申『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～』について、一連の流れの中でそれぞれの目指す方向性について説明。そのうえで、今後大学が対応しなければならない課題を示した。

#### 開催校企画シンポジウム「中退問題から考える大学の質保証」

シンポジスト：濱名 篤（関西国際大学）「大学中退のとらえ方～マクロな視点から」

鈴木 比古（国際基督教大学前学長）「中退問題をとらえる新しい視座」

山本 繁（NPO法人NEWVERY）「学生の中退とは何か—そのメカニズムと理由、対策実施上の課題—」

肥後 功一（鳥根大学）「鳥根大における教育の質保証をめぐって」

司 会：吉田 香奈（広島大学）・森 朋子（鳥根大学）

概要：各大学が改革に取り組む一方で、大学を中退する学生は年々増えつつある。その理由は学習意欲の喪失、人間関係、関心の移行、不本意入学、学業不振など様々であり、修学を断念する実情につ

いては未だに十分な知見が得られていない。社会全体がグローバル化という影響を受けている中で、その時代を生き抜く力を育成し、大学教育の質保証をしていくためには、今のOECD諸国内最低水準にあると言う中退率をどのようにとらえる必要があるのか、問い直さなければならない。中退率が低いから良いのかどうか。シンポジウムでは中退問題のとらえ方を検討し、修学支援を中心に驚愕マネジメントのあり方を論じた。

11月24日（土曜日）

### シンポジウムⅠ「共通教育の新段階」

シンポジスト：吉永契一郎（東京農工大学）「共通教育の新段階—非職業教育大学におけるリメディアル教育とキャリア教育—」

矢内 秋生（武蔵野大学）「専門教育への接続のための全学基礎教育と学科基礎教育—武蔵野BASISと学科基礎科目の進級科目を経た学生—」

居神 浩（神戸国際大学）「ユニバーサル型大学における学士課程教育—ノンエリート・キャリアを展望して—」

司 会：中村 博幸（京都文教大学）・小林 勝法（文教大学）

概要：これまでの共通教育全国調査から言えることは、共通教育が大学の類型によって分化しつつあることであろう。研究中心大学や専門職業大学での共通教育が比較的従来どおりの教養教育の枠組みを保っているのに対して、幅広い職業人の育成あるいは教養教育を柱としている大学では、教育方法がスキル中心になるとともに、教育内容もリメディアル教育からキャリア教育にいたるまで幅広くなっている。後者のような動向の背景には学生の学力低下や未成熟化、意欲低下が進行する中で、大学教育の成果が就職状況に直結すると言った事情が考えられる。これまで、共通教育に関する議論は、教員が教養教育の理念に基づいて実施するものであったが、今日では学生の実態・社会の要請が共通教育の内容を左右し、教員の専門指向とは異なった次元での対応が求められている。こういった実態を各大学の実情紹介を通じて議論し、理解を深めた。

### シンポジウムⅢ「学生支援に携わる教職員に求められる能力とは何か」

シンポジスト：川島 啓二（国立教育政策研究所）「学生支援担当の教職員ための研修の在り方」

橋場 諭（立教大学）「学生支援に携わる教職員のための能力開発とその指標」

大島 啓利（日本学生相談会・広島修道大学）「日本学生相談会認定『学生支援士』について」

司 会：川島啓二（国立教育政策研究所）

指定討論者：小貫有紀子（九州大学）

概要：学生の多様化や大学教育改革の進展に伴って深化・広範化する学生支援の現状と課題について理論的・実証的に分析・検討を行い、今後の展望を考えた。とりわけ教職員の学生支援能力については、その成否を左右するにもかかわらず、これまで具体的に検討されたことが無かった。そこで、教員、事務職員にその能力として何が求められるのか、あるいは今後スタートすることになっている日本学生相談会認定の学生支援士の資格について考えた。ただ、これまで充分議論されてきていないテーマであるだけに、問題の所在や制度紹介にとどまった感じであった。

## 4. 第18回大学教育研究フォーラム

会場校：京都大学

日時：2012年3月15日（木）～16日（金）

出席者：1名 加藤 健二

テーマ：「相互研修型FDの総括」

趣旨：京都大学高等教育研究開発推進センターが「教育関係共同利用拠点（拠点名称：相互研修型FD共同利用拠点）」に認定されて4年経ち、これまでのセンターの活動を総括し、今後の活動への展望をひらくことを目的とした。このことはすなわち、啓蒙型FDとは異なる相互研修型FDの可能性について総合的に評価することに他ならない。しかしフォーラム全体としては、例年通り、日本各地で進められているFD、あるいは授業改善に関する情報の交換会という役割を果たすものであった。

3月15日（木）

個人研究発表

「新入生の実態に合わせたカリキュラムの検討」（ベネッセコーポレーション大学事業部）が一番興味深かった。大学生基礎力を測るテストを開発し、既に9万人に実施したとのこと。その結果の一部が紹介されていた。そのような大規模なテスト開発がなされていることを知り、驚くとともに、本学で進められている教養教育改革の評価データとして活用できないかと考えた。

小講演

「大学におけるキャリア支援・教育はどこに向かうか？ -揺らぐ「就社」社会のなかで-」（法政大学キャリアデザイン学部・児美川孝一郎氏）を聞いた。キャリア教育の第一人者である講演者は、経済界からの圧力のなかで取り組まれている大学におけるキャリア支援がいかに危ういものであるかを解説し、各大学・学部は、「職業的レリバンス」と「基礎的汎用的能力（批判的リテラシー）の養成」という2つの軸の中で自らをどのように位置づけるかを明確にすべきだ、と主張した。本学のスタンス

は大きく後者に比重をかけたものだと認識を新たにさせられた。

## 基調講演

### 「相互研修型FDの総括」(京都大学高等教育研究開発推進センター長・田中每実氏)

#### パネルディスカッション

- パネリスト1 山田 剛史 (愛媛大学教育・学生支援機構 教育企画室准教授)
- パネリスト2 高橋 哲也 (大阪府立大学高等教育推進機構教授/機構長・副学長)
- パネリスト3 夏目 達也 (名古屋大学高等教育研究センター教授)
- パネリスト4 飯吉 透 (マサチューセッツ工科大学教育イノベーション・テクノロジー局シニアストラテジスト)
- パネリスト5 樋口 聡 (文部科学省高等教育局大学推進課大学改革推進室長)
- パネリスト6 大塚 雄作 (京都大学高等教育研究開発推進センター教授)
- 司 会 松下 佳代 (京都大学高等教育研究開発推進センター教授)
- 溝上 慎一 (京都大学高等教育研究開発推進センター准教授)

要旨：ここ数年続けてきた「相互研修型FD拠点形成」の総括が行われた。相互研修型FDの趣旨は、要は上からの押し付けのFDはうまくいかない、必要に基づいて自然発生的に生まれた取り組みしか成功しないということであり、耳の痛い話である。大学教育改革に造詣の深いパネリスト達からは、この取り組みに対するさまざまな視点からの評価が示され、大変興味深かった。そのなかで文科省大学改革推進室長の樋口氏の口から「FDに関わる人は流れの大局を見る必要があり、省庁の個々の施策に振り回されてはいけない」との言が飛び出した時には思わず失笑してしまった。ただし、形だけのFDの取り組みは徒労感以外何も生み出さないというのは正にその通りだと思われる。

## 3月16日 (金)

### 個人研究発表

2日目午前の個人研究発表では、就業力あるいは汎用的能力の養成や測定に関する発表を聞いた。各大学でさまざまな取り組みがなされているが、汎用的能力の養成といっても、その学科・専攻の特色に応じた(活かした)取り組みがよい成果を生み出しているように思われた。

### 小講演

「討議力養成を中心とする教養教育の改革」(東大・山本泰氏)における、東大での教養教育改革の報告を大変興味深く聞いた。さまざまな授業で、また、学内のさまざまな場所で討議力育成を中心に据えた教養教育を展開すべく、氏が委員長となって年配教員を巻き込んで改革が進められたという。

例えば、階段教室ではなく、可動機にしてレイアウトを自由に変えられるようにした教室を年配教員に使ってもらうよう算段した件には笑わせられた。しかし、一旦その教室のよさが分かった教員は、自らの授業の変化についても熱く語るようになったという。FDの真髓の一片を垣間見たような気がした。

## ラウンドテーブル

### 「高次リテラシーと批判的思考の教育」

企画：楠見 孝（京都大学大学院教育学研究科）

話題提供：楠見 孝（京都大学大学院教育学研究科）

沖林 洋平（山口大学教育学部）

原 塑（東北大学大学院文学研究科）

林 創（岡山大学大学院教育学研究科）

指定討論：道田 泰司（琉球大学教育学部）

司 会：子安 増生（京都大学大学院教育学研究科）

要旨：大学教養教育課程で試みられている各種リテラシー教育と批判的思考育成との関係について、実践に基づいた考察が報告された。演者のほとんどが「批判的思考力を育む」（有斐閣）の執筆者であり、報告の内容もこの本に書かれているものが土台となっていた。それはそれとして、このラウンドテーブルでの議論は、本学の教養教育、特にTGベーシックと呼ばれている全学共通科目群の位置づけや理解において、それらを「市民リテラシー科目」ととらえ、批判的思考力の基盤を強化するものと見なすという視点を与えてくれる。その後の高次リテラシーとしての学問リテラシー、研究リテラシーへの連結の問題についても示唆に富んでいた。

# 東北学院大学教育研究所2012年度活動・会議報告

## 1. 教育研究所報告集第12集 配布・発送:2012年5月

学内配布365部 学外発送281部

## 2. 第24回所員会議 2012年8月4日(土)

泉キャンパス 東北学院大学教育研究所

### 1. 報告事項

#### (1) 昨年度予算決算

平成23年度教育研究所予算の各項目の執行状況報告

#### (2) 報告集のホームページ公開

昨年度末、実質今年度初に、報告集1~12集を原稿pdfファイルで公開

#### (3) 今年度学会出張

- ・大学教育学会（開催済） 参加者 水谷先生
- ・東北・北海道地区大学等・共通教育研究会 9月 参加者 小原先生

### 2. 審議事項

以下の6点について審議され、承認された。

#### (1) 今年度の活動計画予算、関連学会への出張他

- ・平成24年度教育研究所予算示達額を確認
  - (ア) 図書費、消耗品費等の希望調査
  - (イ) 旅費について
- ・関連学会への出張
  - (ア) 課題研究集会、大学教育研究フォーラム出張者は希望を取り、後日決定

#### (2) 研究所報告集第十三集（2013年3月刊行予定）の編集方針

- ・論文〆切12月20日厳守
  - ・掲載予定
    - (ア) 水谷修先生「大震災と大学教育」
    - (イ) 片瀬一男先生（小林先生、亀谷氏）スタッフデベロップメント研究
    - (ウ) 千葉昭彦先生（加藤先生）TGスタンダード（背景構造、基本方針、問題点など）
- 学務担当・副学長にお願い

(エ) 渡部友子先生 英語教育

(3) 新規事業の申請、来年度予算編成

- ・ 予算編成に係わる重点項目×切9/3
- ・ 新規事業計画書、機器備品購入計画書×切12月初
- ・ 重点項目、新規事業計画等は、アイデア募集→原案作成→原案メールにて報告、検討の後作成し提出

(4) PCのネット解除について

- ・ データ流出防止策は、乙藤先生が対応

(5) 学生データの利用許諾について

- ・ 個人成績でデータ利用に関し、学生へ契約書で処理する可能性については、所長が入試部に確認。
- ・ 学生に成績データの利用許諾を拒否された場合については、小原先生が対応策を検討。

(6) 報告集ホームページ公開に伴う著作権処理について

報告集投稿規定（ホームページ公開、著作権の件を含む）を作成することとし、渡部先生が原案作成にあたる

## 既刊「教育研究所報告集」の主要内容

### 第12集 2012年3月

#### ○研究報告

- ・アカデミックスキル・ルーブリックの開発－初年次教育におけるスキル評価の試み－  
葛西 耕市・稲垣 忠

#### ○報告

- ・「学生生活実態調査」(2006年・2010年)にみられる本学学生の特徴  
—私大連全体との比較の中で— 斎藤 誠

#### ○書評

- ・今日の「大学改革」の可能性 —潮木守一『フンボルト理念の終焉？現代大学の新次元』を読んで—  
千葉 昭彦

#### ○シリーズ・東北学院大学の教育を考える 第3回

- ・教養教育雑感 —自然科学教員が見た大学教育— 高橋 光一

### 第11集 2011年3月

#### ○研究報告

- ・初年次教育による高校と大学の接続－東北学院大学教養学部の場合— 片瀬 一男・葛西 耕市
- ・入試方法と学業成績－東北学院大学2009年度卒業生データの分析— 神林 博史

#### ○報告

- ・2009年度「卒業時意識調査」報告 加藤 健二

#### ○シリーズ・東北学院大学の教育を考える 第2回

- ・東北学院(大学)の英語教育を考える 戸田 征男

### 第10集 2010年3月

#### ○特別報告

- ・本学の教育課程改革にむけての私案 斎藤 誠

#### ○研究報告

- ・AO入試に関する試論(3) 片瀬 一男  
—なぜ入試改革は「失敗」しつづけたのか？  
：東北学院大学工学部の場合—
- ・日本の大学の「教養教育」の新たな動向

—日本社会や大学教育の構造転換の中で—

岩谷 信

○報告

・2009年度「新入生意識調査」について

教育研究所

○シリーズ・東北学院大学の教育を考える 第1回

・「自己チュウ」批判論の盲点

—予言された「ナルキッソスの死」の意味—

岩谷 信

## 第9集 2009年3月

○研究報告

・A O入試に関する試論 (2)

片瀬 一男

・教養教育科目としての「キリスト教学」の意味と課題

佐藤 司郎

・性の多様性に対応する人権教育についての考察

魚橋 慶子

○報告

・「大学生の勉強法」を教える初年時授業

—「言語文化基礎演習」の授業内容とその改善プロセス

佐伯 啓

・学士課程教育のめざす方向とその背景

吉村功太郎

○図書紹介

・神永正博著『学力低下は錯覚である』

菅山 真次

## 第8集 2008年3月

○報告

・初年次教育としての「大学生活入門」—法学部における実践報告—

斉藤 誠

・社会変容とこれからの教養教育

佐々木俊三

○研究報告

・A O入試に関する試論 (1)

—教養学部におけるA O入試入学者の成績を事例に—

片瀬 一男

○特別報告

・各大学の「大学教育センター」系組織とその特色

—本学の「教育力の向上」を目指して・準備資料—

教育研究所・所員会議

## 第7集 2007年3月

### ○特別報告

「大学教育への取り組みに関する調査」(2006年11月実施)

・ユニバーサル化した大学における教員の苦悩

—東北学院大学の教員意識調査から—

片瀬 一男

・跋：調査報告書を読んで

副学長(学務担当) 大塚 浩司

### ○報告

・経済学科原級留の実態とその要因の調査報告

千葉 昭彦

### ○教育研究所所蔵図書紹介

・『恐るべきお子さま大学生—崩壊するアメリカの大学』

松本 洋之

## 第6集 2006年3月

### ○報告論文

・「工学基礎教育センター」の果たす役割と期待

石橋良信、星 善元、女川 淳

・文学部歴史学科におけるキャリア支援教育

—「就職の基礎」の〈解説〉を中心に—

楠 義彦

### ○研究報告

・ハビトゥスとしての読書の力

—東北学院大生の図書館利用と学業成績—

片瀬 一男

## 第5集 2005年3月

### ○報告論文

・成績分析からみた大学教育研究(4)

—アドミッションズ・オフィス方式による入学生の学業成績を中心に—

大江 篤志

・経済学科生の入試類型別成績

調査報告：本学経済学科生の成績と入試類型との関連について

原田 善教

・退学者動向・調査報告(1) 教養学部の場合

意欲があって大学を去る者、意欲を失ってやめる者

二つの不幸な退学理由へのブル代数アプローチ

片瀬 一男

### ○特別報告

・教養学部「学生による授業評価」実施概要

教養学部授業評価委員会

## 第4集 2004年3月

### ○報告論文

- ・東北学院大学工学部における教育改善の試みと将来構想  
石橋良信、星 善元、小野 孝、志子田有光、石川雅美
- ・カード利用による「事案のルール」獲得の可能性  
陶久 利彦
- ・互惠を原則とした地域と大学との連携  
—東北学院大学の社会教育実習・ボランティア活動の実践—  
水谷 修
- ・NPOが大学と連携することの意義  
—東北学院大学「ボランティア活動」への取り組み—  
特定非営利活動法人グループゆう 中村 祥子
- ・東北学院大学と連携した講座造り実習の取り組み  
仙台市中央市民センター 今川 義博

## 第3集 2003年3月

### ○成績分析からみた大学教育の研究(3) 大江 篤志

入学類型と全学共通科目学業成績との関係を中心に

1. 課題と方法 (1)目的 (2)方法 分析対象とする学生/入学類型/全学共通科目/  
英語系科目A1/英語系科目A2/4科目の学業成績の関係
2. 全学共通科目の学科別学業成績平均 (1)キリスト教学系科目X1 (2)キリスト教学系科目X2  
(3)英語系科目A1(4)英語系科目A2(5)4科目の学業成績の関係
3. 文学部 3-1英文学科 キリスト教系科目X1.X2 3-2史学科 キリスト教系  
科目X1.X2/英語系科目A1.A2
3. 経済学部 4-1経済学科 キリスト教系科目X1.X2/英語系科目A1.A2  
4-2商学科 キリスト教系科目X1.X2/英語系科目A1.A2
4. 法学部法律学科 キリスト教系科目X1.X2/英語系科目A1.A2
5. 工学部 6-1機械工学科 キリスト教系科目X1.X2/英語系科目A1.A2 6-2電気工学科 キ  
リスト教系科目X1.X2/英語系科目A1.A2 6-3応用物理学科 キリスト教系科目X1.X2/  
英語系科目A1.A2 6-4土木工学科 キリスト教系科目X1.X2/英語系科目A1.A2
1. 教養学部教養学科 7-1人間科学専攻 キリスト教系科目X1.X2/英語系科目A1.A2 7-2言  
語科学専攻 キリスト教系科目X1.X2/英語系科目A1.A2 7-3情報科学専攻 キリスト教  
系科目X1.X2/英語系科目A1.A2
2. 二部 8-1二部英文科 キリスト教系科目X1.X2 8-2二部経済学科 キリスト教系科目X

1.X2/英語系科目A1.A2

3. 総括と検討 9-1主要入学類型の分布 男子/女子 9-2学科内部における学業成績の男女差  
9-3入学類型別にみた学業成績の男女差 キリスト学系科目/英語系科目 9-4入学類型と学業成  
績 キリスト学系科目/英語系科目/キリスト教系科目と英語系科目の関係

おわりに

## 第2集 2002年3月

○成績分析からみた大学教育の研究(2)

大江篤志・水谷修、他

入学類型と学業成績との関係

4. 課題と方法 (1)目的 (2)方法

5. 文学部 2-1英文学科 入学類型の分布/登録科目, 放棄科目,学業成績/

学業成績/英文科小括 2-2史学科 入学類型の分布/登録科目, 放棄科目,  
学業成績/学業成績/史学科小括

6. 経済学部 3-1経済学科 入学類型の分布/登録科目, 放棄科目,学業成績/学業

成績/経済学科小括 3-2商学科 入学類型の分布/登録科目, 放棄科目,  
学業成績/学業成績/商学科小括

7. 法学部法律学科 入学類型の分布/登録科目, 放棄科目,学業成績/学業成績/法律学科小括

8. 教養学部教養学科 5-1人間科学専攻 入学類型の分布/登録科目, 放棄科目,学業成績/学業成績

/人間科学専攻小括 5-2言語科学専攻 入学類型の分布/登録科目, 放棄科目,学業成績/学業  
成績/言語科学専攻小括 5-3情報科学専攻 入学類型の分布/登録科目, 放棄科目,学業成績/  
学業成績/情報科学専攻小括

9. 二部 6-1二部英文科 入学類型の分布/登録科目, 放棄科目,学業成績/学業成績/二部英文学科

小括 6-2二部経済学科 入学類型の分布/登録科目, 放棄科目,学業成績/学業成績/二部経済  
学科小括

おわりに

## 第1集 2001年3月

○成績分析からみた大学教育の研究(1)

大江篤志・水谷修

はじめに

1. 各学科の学生構成 (1)問題関心 (2)学部学科別学生数 (3)各学科の男女比
2. 対象卒業生の成績
3. 合否、放棄科目数の学科男女別分布 文学部四学科 経済学部三学科  
法学部法律学科 教養学部 小括
4. 学生の移動の場 4-1-(1)入学類型の多様化 (2)留年と原級留置き、休学と退学  
(3)科目の性格 (4)教員カテゴリー (5)課外活動などとの関連  
4-2-開放系システムとしての大学教育

# 東北学院大学教育研究所規定

(制定 平成10年4月1日)

(設置)

**第1条** 本学に教育研究所（以下「本研究所」という。）を置く。

(目的)

**第2条** 本研究所は、高等教育に関する研究を行い、本学教育の向上に資することを目的とする。

(事業)

**第3条** 本研究所は次の事業を行う。

- (1) 高等教育の基本問題に関する研究
- (2) 本学教育の基本問題に関する研究
- (3) 高等教育に関する情報サービス
- (4) 刊行物の発行，並びに講演会等の開催
- (5) 研究に必要な資料の収集，及び整理
- (6) その他必要な事項

(構成)

**第4条** 本研究所に所長1名，所員若干名を置く。

(所長)

**第5条** 所長は，大学長がこれを委嘱する。

2 所長の任期は2年とする。但し，再任を妨げない。

(所員)

**第6条** 所員は，本学の専任教員より所長が推薦し，大学長がこれを委嘱する。

2 所員の任期は2年とする。但し，再任を妨げない。

(総会)

**第7条** 総会は年1回所長がこれを招集する。但し所長が必要と認めたときは，臨時総会を招集することができる。

2 総会は所員の過半数の出席がなければ開くことができない。

3 総会の議長は所長がこれにあたる。

4 総会は，本研究所の事業及びこれに関することを審議する。

5 総会の決議は，出席者の過半数をもってする。

(事務職員)

**第8条** 本研究所に事務職員若干名を置く。事務職員は庶務に従事し，本研究所の事業遂行に必要な事務を処理する。

(経費)

**第9条** 本研究所の費用は基金，寄付金，事業収入及び本学からの補助金によって支弁する。

(改廃)

**第10条** この規定の改廃は，総会の決議及び全学教授会の議を経て理事会が行う。

**附則**

1 この規定は，平成10（1988）年4月1日から施行する。

2 昭和42年4月1日制定の東北学院大学教育研究所規定及び昭和47年10月1日制定の東北学院大学一般教育研究所規定は廃止する。

## 第13集 執筆者紹介 (掲載順)

渡部 友子 (東北学院大学教養学部准教授)

亀谷 純 (宮城学院女子大学教育研究支援グループ職員)

斎藤 誠 (東北学院大学法学部教授・学務担当副学長)

### 教育研究所 所員紹介

所長	教養学部教授	大江 篤志
所員	文学部教授	楠 義彦
所員	経済学部教授	千葉 昭彦
所員	経営学部教授	斎藤 善之
所員	法学部准教授	小原 将照
所員	工学部教授	足利 正
所員	工学部教授	神永 正博
所員	教養学部教授	乙藤 岳志
所員	教養学部教授	片瀬 一男
所員	教養学部教授	加藤 健二
所員	教養学部教授	神林 博史
所員	教養学部教授	松本 秀明
所員	教養学部教授	水谷 修
所員	教養学部准教授	渡部 友子

東北学院大学教育研究所報告集 第13集

発行日 2013年3月10日

編集兼  
発行人 大江篤志

発行所 東北学院大学教育研究所  
〒981-3193 仙台市泉区天神沢2-1-1  
Tel. 022-375-1184

印刷 東北堂印刷株式会社  
〒982-0804 仙台市太白区鉤取一丁目212  
Tel. 022-245-0229